

教育長室からのお知らせ No. 55(令和 2 年 2 月)

例年、冬本番の寒さとなる 2 月ですが、暦の上では 2 月 4 日に立春を迎えました。立春は冬至と春分の間に当たります。冬と春の分かれる節目の日である「節分」の翌日で、「寒さがあけて春に入る日」いわば春の初日です。この暖かな春の日差しのように子どもたちの心が暖かで穏やかであることを願ってやみません。

さて、新たな年を迎えても、虐待、いじめ、不登校に関する報道が後を絶ちません。いじめ・不登校への対応は、学校の役割が非常に大きいことは十分に理解されてきています。しかしながら、子どもから発せられたSOSを学校側が拾える体制になかったとの報道を耳にするたびに、胸が痛みます。

大阪府八尾市立小 6 年の女兒が、同級生から受けた暴行などで心的外傷後ストレス障害と診断され不登校になっている問題では、市が設置した外部委員会が令和 2 年 1 月 21 日に公表した再調査の報告書の中で、「いじめに対する学校の初期対応に問題があった」とし、当時の校長や担任らがいじめと捉えず、加害児童への指導も不十分だったと指摘しています。

いじめによる重大事態や指導上の事故に関する調査報告書には、被害者や遺族への学校の対応、教育的な対応のあり方の視点が十分でない結論付けられているものが、残念ながら現実として多く見受けられます。

私は、市川の学校教育に携わるすべての大人が、いじめや不登校対応を自分事として捉えることが大切だと考えます。教職員が、子どもたちの話に心から耳を傾け、「聞いているよ」というメッセージを言葉や態度に込めて聞くことで、子どもたちは安心して話すことができます。また、子どもの心に寄り添いながら心の整理を手伝うことで、子どもたちがはっきり認識していなかった「心の中にあるもの」を見つけてあげることができます。

子どもたち一人ひとりの得意分野が生かされるよう、教職員同士が積極的に話し、子どもたちの適材適所への役割分担に心がけること、また、子どもたちの良さや頑張り、工夫等を積極的に評価し、本人に伝えたり、ホームルームの場等で紹介したりすることで、子どもたちのやる気を引き出し、学校が一つのチームとなって風通しの良い学級・学校づくりに努めてまいります。

学校の一番の宝は「子どもたち」です。どの子の命の誕生にも両親の存在があり、その両親の命の誕生にもそれぞれの両親の存在があるわけで、その方々にとっては(現在様々な事情で一緒にいられない場合もありますが)、その子は「〇〇家の宝」なのです。その宝である子どもたちを、そしてその命をお預かりしているという覚悟をもって、日々の教育にあたる使命があると改めて思うのであります。「子どもの命を守りぬく覚悟」を教育の根幹とし、引き続き、子どもたちのために全力で取り組んでまいります。

教育長 田中 庸恵